



口絵3 重要文化財 絹本著色織田信長像（修理後）
天正11年（1583）古溪宗陳賛 神戸市立博物館蔵



口絵4 修理後 本紙

〈修理報告〉重要文化財 絹本着色織田信長像

石 沢 俊

要 旨

近年当館が実施した重要文化財 絹本着色織田信長像（天正十一年賛）の解体修理報告。当館の資料保存の取り組みとして、本修理の概要とそこで得られた知見の報告を目的としている。解体修理で得られた知見は大きく二つある。ひとつは裏彩色がよく残っていた上、表裏を同系色で塗り分けていたことが判明した。さらに、表面の汚れ除去によって、束帯の木瓜紋が明瞭となった。本図は後世の修理で上畳などに補筆が認められるが、京都・大雲院本との比較から制作当初はより装飾が施されていた可能性がある。歿後間もない遺像として、本図が信長像のひとつの規範となった可能性を指摘し、さらなる考察の端緒とするものである。

はじめに

重要文化財 絹本着色織田信長像（以下、「神戸市博本」と称する）は池長孟コレクションを代表する作品のひとつである。上畳に座する束帯姿の信長像は、画面上部に記された大徳寺総見院初代住持・古溪宗陳（一五三二〜九七）の賛から、天正十一年（一五八三）信長一周忌のために制作されたことが判明する。制作時期、目的が明らかでない遺像として、昭和三十二年（一九五七）には国の重要文化財に指定されている。信長像の代表的作品のひとつとして、当館での展示はもとより、他館の展覧会でも活用されてきた。一方で経年によって、さまざまな損傷が認められるようになり、早急に解体修理を行う必要性が出てきた。博物館資料の適切な保存の

ため、当館では平成二十六年度から二十七年度にかけて、文化庁監督のもとで解体修理を実施した。本稿はこのたびの解体修理とそこで得られた知見の報告を目的とするものである。修理の概略は、今回の修理を依頼した株式会社岡墨光堂の修理報告書に基づく。紙幅の都合、神戸市博本の図像、題賛、伝来についての考察は、機会を改めて紹介することをおこわりしておく。

修理報告

1. 作品の構造等

（1）品質形状（写真1）

絹本着色 掛軸装

中廻し風帯 茶地牡丹唐草文金欄

総縁 白茶地応夢衣綾

軸首 唐草唐花文金鍍金金軸

(2) 法量

全体 縦158.6 cm 横55.2 cm

本紙 縦73.25 cm 横36.8 cm

(3) 本紙組成

材質 絹糸

密度 1寸間(3.0 cm角)

経 70本 31中(平均)

緯 120本 21中×2(平均)

(4) 保存箱

中箱 屋郎箱。外箱 漆塗差込箱。(写真2)

2. 修理前の状況

- ・緑青、白色、黒色等の彩色で膠着力の低下による絵具層の剥離が発生し、緑青部分においては粉状化が進行している。(写真3)
- ・白色絵具箇所以前に修理で施されたと考えられる加筆が見られる。(写真4)
- ・本紙料絹のはつれが見られる。(写真5)
- ・経年により、表装全体の厚みのバランスが崩れ、波打ちが発生している。(写真6)

- ・総縁に点状の染みが見られ、特に下軸に多く発生している。(写真7)

- ・中廻し裂は、金糸の断裂が多く見られる。(写真8)

3. 修理後の状況

(1) 品質形状(口絵3・4)

中廻し風帯 茶地牡丹唐草文金欄(元のものを再使用)

総縁 茶地応夢衣綾

軸首 唐草唐花文金鍍金金軸(元のものを再使用)

(2) 法量

全体 縦147.3 cm 横53.4 cm

本紙 縦73.25 cm 横36.8 cm

(3) 使用材料

材 料 名	製 作 者
補修絹電子線劣化絹	廣信織物製
肌裏紙楮紙(美濃紙)	鈴木製
増裏紙楮紙(美濃紙)	上窪製
折れ伏せ紙 楮紙(美濃紙)	鈴木製
中裏紙楮紙(美濃紙)	上窪製
総裏紙楮紙(宇陀紙)	福西製

(4) 保存箱等

桐製太巻添軸。桐製屋郎箱。漆塗紐付台差外箱（前田製）（写真9）

4. 修理方針

- ・写真撮影を行い、本紙の状態を調査する。
- ・掛軸装を解体し、本紙の旧裏打紙を、肌裏紙を残して除去する。
- ・浄化水にて本紙表面の汚れを除去する。
- ・膠水溶液にて絵具層の剥落止めを行う。以下、各工程の進行に応じて適宜剥落止めを行う。
- ・布海苔を用い、養生紙にて表打ちを行う。
- ・旧肌裏紙及び、旧補修絹の除去を行う。
- ・本紙欠失箇所裏面から劣化絹にて補絹を施す。
- ・本紙の色調に合わせて、染薄美濃紙にて肌裏を打つ。
- ・表打ちの養生紙を除去する。
- ・美栖紙にて増裏打ちを行う。
- ・表装裂地は中廻風帯を元使いし、総縁は新調し、肌裏を打つ。
- ・折れ伏せを入れ、折れを直す。
- ・仮張りされた本紙と表装裂地を、掛軸装の形に付け廻しをする。
- ・宇陀紙にて総裏打ちを行い、仮張りし十分な乾燥期間をおく。
- ・補絹の箇所補彩をする。
- ・軸首は元使いし、軸木、発装、啄木等を新調し掛軸装に仕立てる。

- ・桐製太巻添軸及び、桐製屋郎箱、桐製漆塗外箱を各新調し、羽二重の包裂に包み納入する。

5. 修理工程

(1) 調査、記録

- ・表装及び本紙の状態を調査、記録し、損傷の状態等の写真撮影を行った。（写真10）

(2) 剥落止め

- ・墨書及びそれぞれの絵具層の状態にあわせて濃度1〜2%に調製した膠水溶液を塗布、浸透させ、剥落止めを施した。

(3) 解体

- ・表装裂地から本紙を取り外し、旧肌裏紙以外の裏打紙を除去した。（写真11）

(4) 汚れの除去及び表からの旧補修絹の除去

- ・旧裏打紙を除去した本紙に、本紙表面より浄化水を噴霧し、下に敷いた吸い取り紙に水分を吸わせる方法を用いて、水溶性の汚れを除去した。

- ・本紙料絹及び絵画層が安定した状態であることを確認した後、本紙料絹の欠失箇所よりも大きくあてられている旧補修絹を本紙表面より除去した。（写真12）

(5) 表打ち

- ・布海苔水溶液を用いて本紙表面に養生紙3層の表打ちを行った。

(6) 旧肌裏紙及び旧補修絹の除去

- ・本紙表面に水分が浸透することのないよう水分量を最小限に調整し、旧肌裏紙の除去を行った。旧補修絹も同様に最小限の水分にて除去した。(写真13・14)

(7) 裏面調査

- ・本紙裏面の写真撮影を行い、調査、記録した。(写真15～20)

(8) 補絹

- ・電子線で劣化させた本紙料絹と同質の補修絹を、本紙欠失箇所へ補填した。

(9) 肌裏打ち

- ・矢車にて染色した後、炭酸カリウムにて色素を定着させた美濃紙にて、新糊(小麦澱粉糊)を用い、肌裏打ちを行った。(写真21)

(10) 裂調整

- ・新調する表装裂地及び元使いの表装裂地を楮紙にて肌裏打ちを施した後、美栖紙にて増裏打ちを行い、一時仮張りをして乾燥させた。

(11) 増裏打ち

- ・表打ち除去後、美栖紙にて古糊(新糊を10年程度涼暗所に保存した糊)を用い、増裏打ちを行った。(写真22)

(12) 折れ伏せ入れ

- ・本紙の折れ跡、亀裂、欠失、元使いの裂地の折れ跡及び今後折れの発生する可能性の高い箇所へ、2～3mmの細い帯状に裁断

した薄美濃紙を用いて、新糊にて補強のための折れ伏せ入れを行った。その後、一時仮張りをした。(写真23)

(13) 付け廻し

- ・本紙及び表装裂地を接合し掛軸装の形に整えた後、宇陀紙を用いて古糊にて総裏打ちを行い仮張りをし、十分に乾燥させた。

(写真24)

(14) 補彩

- ・新たに補填した補絹部分に本紙の地色を基調色とした補彩を施した。

(15) 乾燥

- ・表具を裏張りし、十分に乾燥させた。

(16) 仕上げ

- ・元のを調整した軸首及び新調した中軸、発装、啄木等を取り付け、掛軸装に仕上げた。

(17) 収納

- ・桐製太巻添軸及び、桐製屋郎箱、漆塗紐付台差外箱を新調し、羽二重裂に包み収納した。

6. 特記事項

(1) 旧補修絹について

本紙料絹欠失箇所には、表面より補修絹が補填されており、旧補修絹のなかには、本紙欠失箇所よりも大きく補填されている箇所が

あった。本紙料絹と旧補修絹の重なる箇所では、今後本紙の巻き解き等の過程で擦れや更なる本紙欠失の進行等の損傷の原因になることが考えられたため、表面より除去を行った。

それ以外の旧補修絹の補填箇所については、表打ちを行い、旧裏打紙を全て除去した後、裏面より旧補修絹の除去を行った。

旧補修絹の除去を行った後、本紙料絹の組成調査に基づいた補修絹を新たに準備し、本紙料絹欠失箇所に補修絹を補填した。

(2) 甲板について

旧保存箱には、過去の保存箱の甲板（墨書あり）が収納保存されていた。この甲板は、本紙の由来を示す貴重な史料であることから、新調する保存箱の底に本紙と共に収納することとした。甲板の周囲は他の材で補強されていたが、保護する強度を失っていた。この甲板を保護し、強度を保つために甲板の周囲に新しい材を取り付けた。

（写真25・26）

(3) 顕微鏡写真について

本紙の表裏両面より料絹及び絵具、墨等の顕微鏡写真の撮影をし、調査を行った。

知見報告

このたびの修理を通して、新たに得られた知見は次の二点である。

(1) 裏彩色

解体前の調査では、裏彩色は過去の修理でかなり剥落していると想定していた。旧肌裏紙を除去した結果、裏彩色はきわめてよく残っていることが判明した。信長の顔、束帯、畳など、全面にわたって丁寧に裏彩色が施されている。とりわけ、裏面の絵画部分に白色のみを施すのではなく、表面と同じ色で塗り分けを行うのはきわめて珍しい。（写真27～32）

(2) 木瓜紋

絵画面の汚れを除去したことなどにより、束帯に施されていた文様がはっきりと確認できるようになった。この文様は織田家の家紋である木瓜紋と考えられる（画像33・34）。

なお、神戸市博本と同様に右手に杓を垂直に持ち、左脇に腰刀を佩^はき、上畳に座する束帯姿の信長を描いた作例はいくつか確認されている。なかでも、京都・大雲院本（江戸時代前期）では、神戸市博本と同様に束帯に木瓜紋が施されている¹。神戸市博本は後世の修理過程で畳縁などに補筆が認められるが、当初は大雲院本のように装飾が施されていた可能性がある。

大雲院本は帳と御簾を上部に配し、神殿に座す信長Ⅱ神格化された信長を描いたものである。図像の共通性から考えるに、歿後間もない遺像である神戸市博本は、信長が神格化される過程でひとつの

規範として理解されていたのではないか。他の信長像との比較、伝来の検討などは引き続き考察を進め、改めて紹介したい。

〔附記〕

神戸市博本の修理に際しては、文化庁の重要文化財修理事業費国庫補助ならびに公益財団法人住友財団の文化財維持・修復事業助成を受けました。また、本図の修理ならびに本稿作成にあたっては株式

会社岡墨光堂及び岡岩太郎氏の協力を得ました。末筆ながら、御礼申し上げます。

一 『戦国時代展』図録（東京都江戸東京博物館・京都府京都文化博物館・米沢市上杉博物館・読売新聞社編、読売新聞社発行、平成二十八年）作品番号六〇



写真1 修理前 表具全図

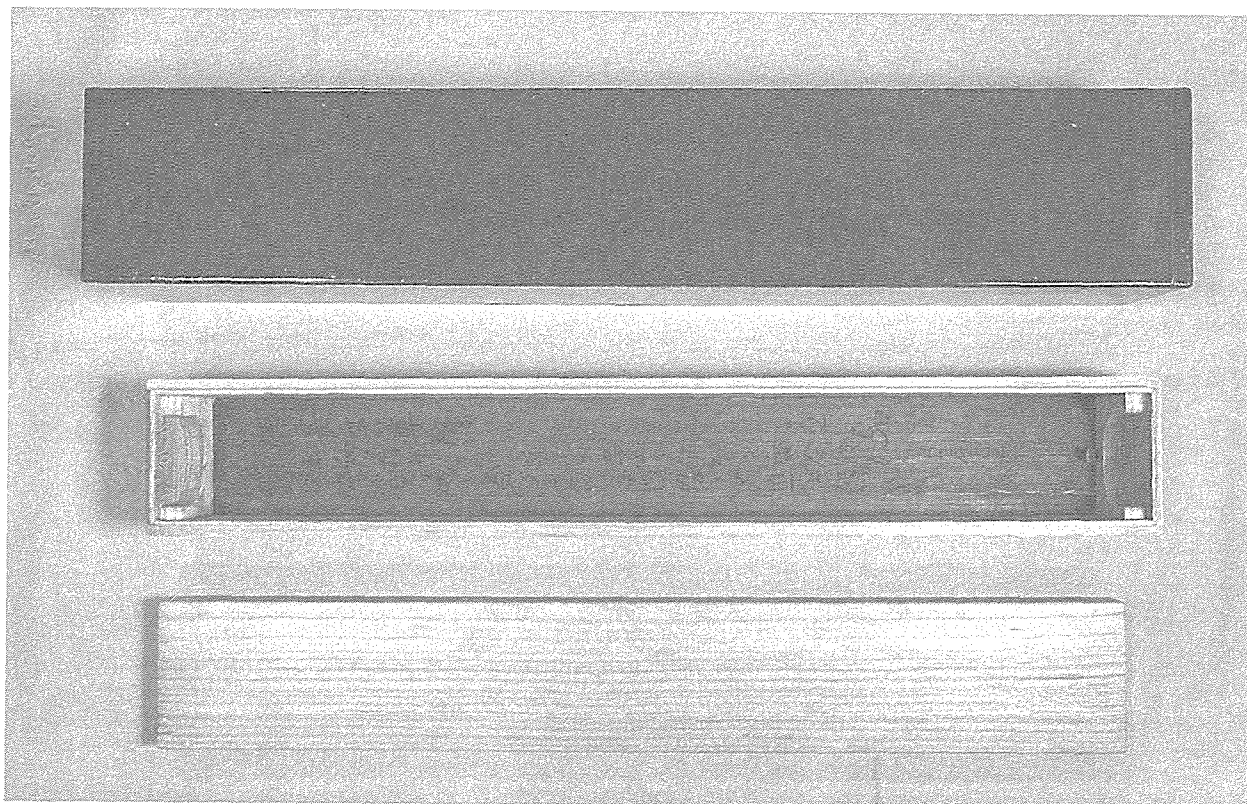


写真2 旧保存箱



写真3-2 修理後

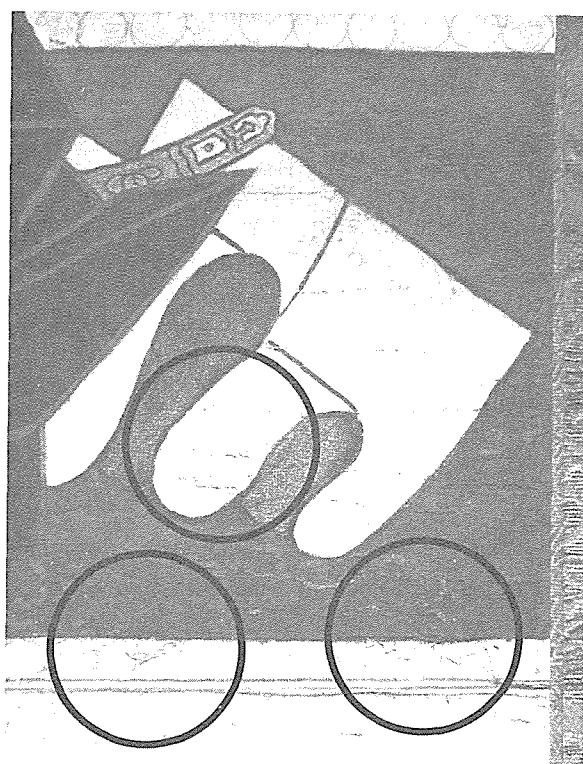


写真3 修理前 損傷

絵具層の剥離（丸部分）、粉状化剥落（緑青）

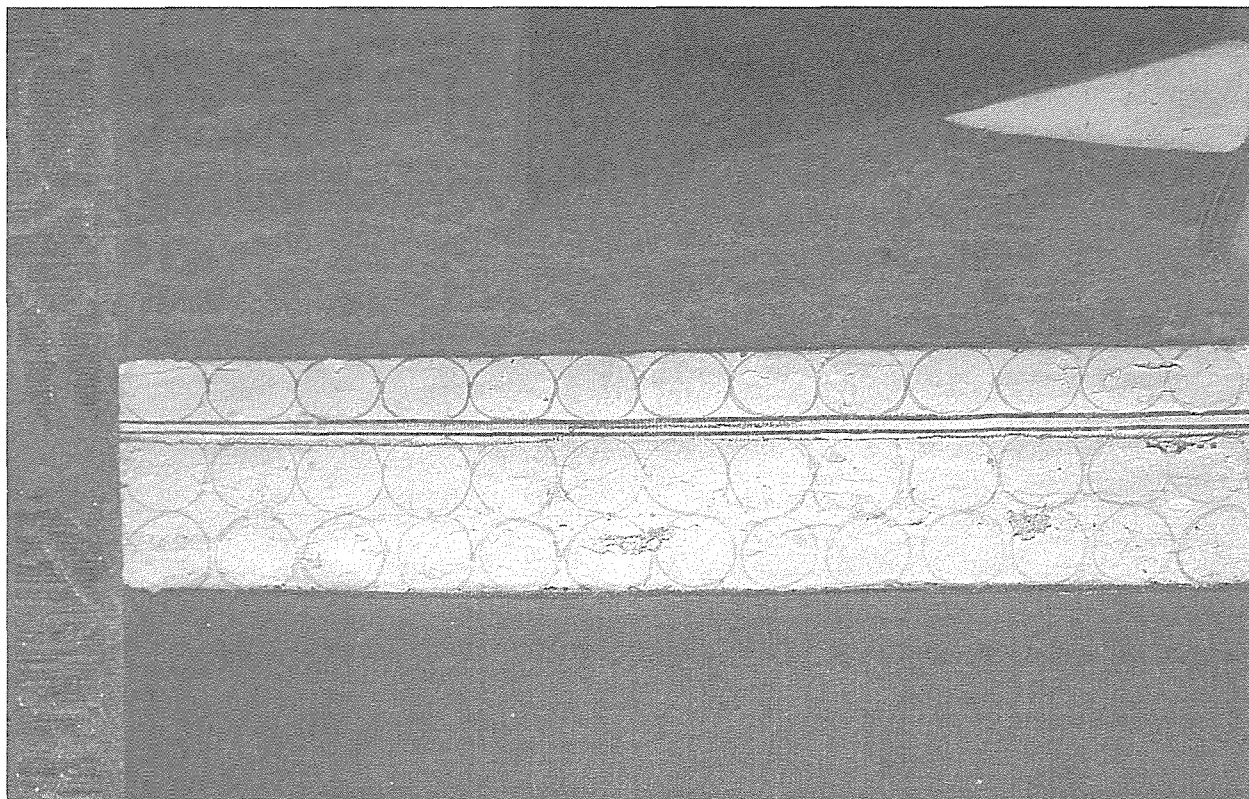


写真 4 修理前 損傷 白色絵具の加筆

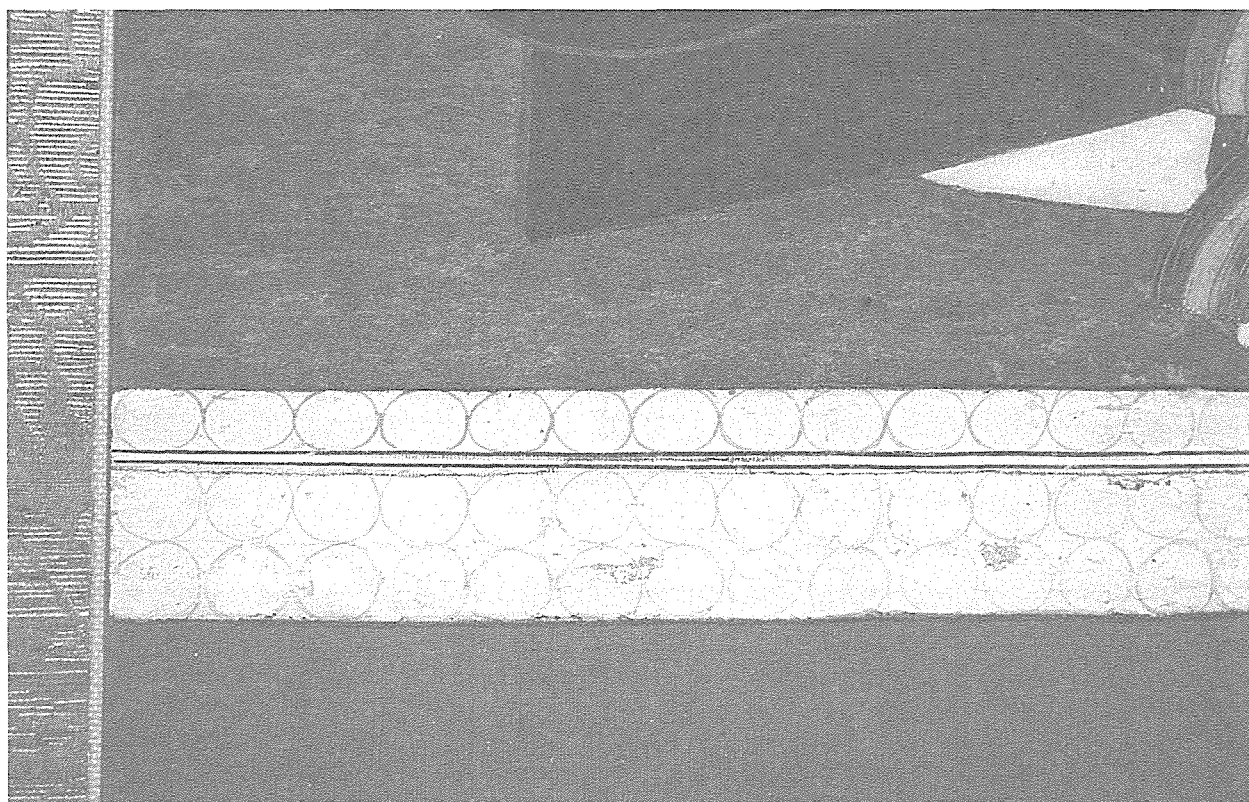


写真 4-2 修理後

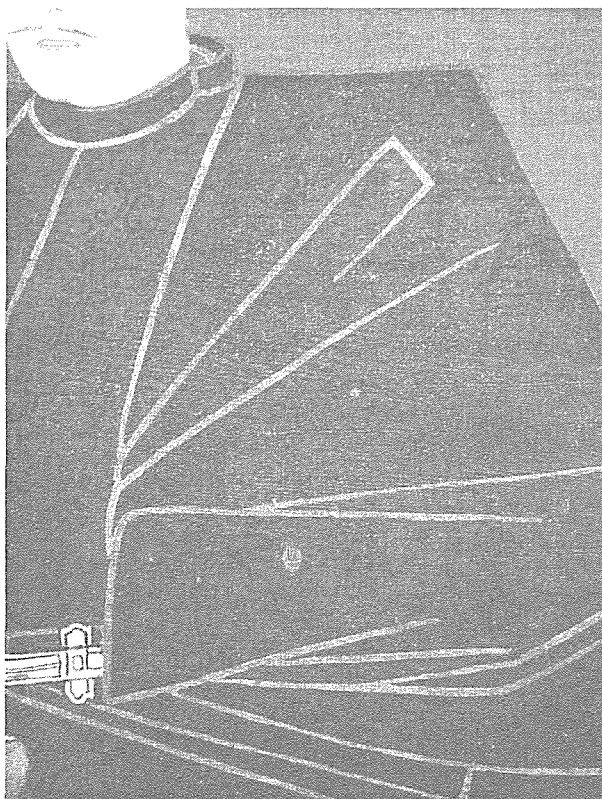


写真 5-2 修理後

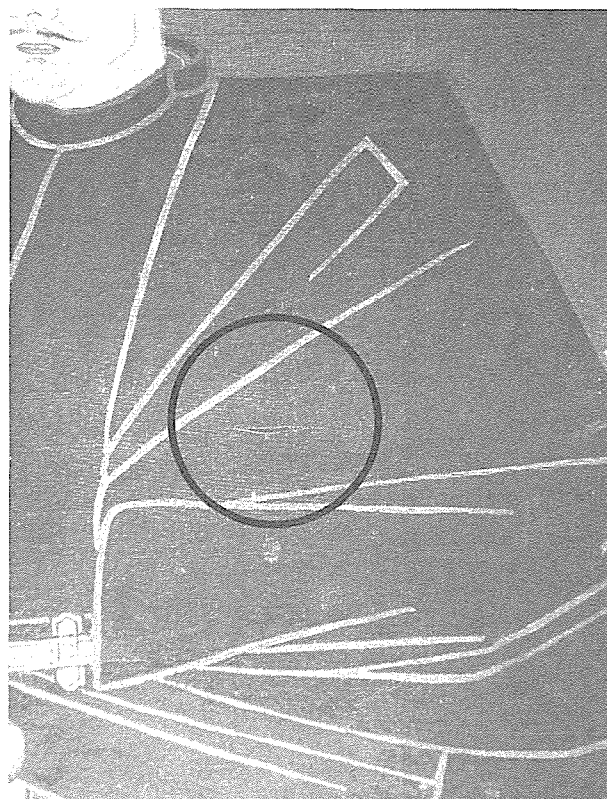


写真 5 修理前 損傷 料絹のほつれ

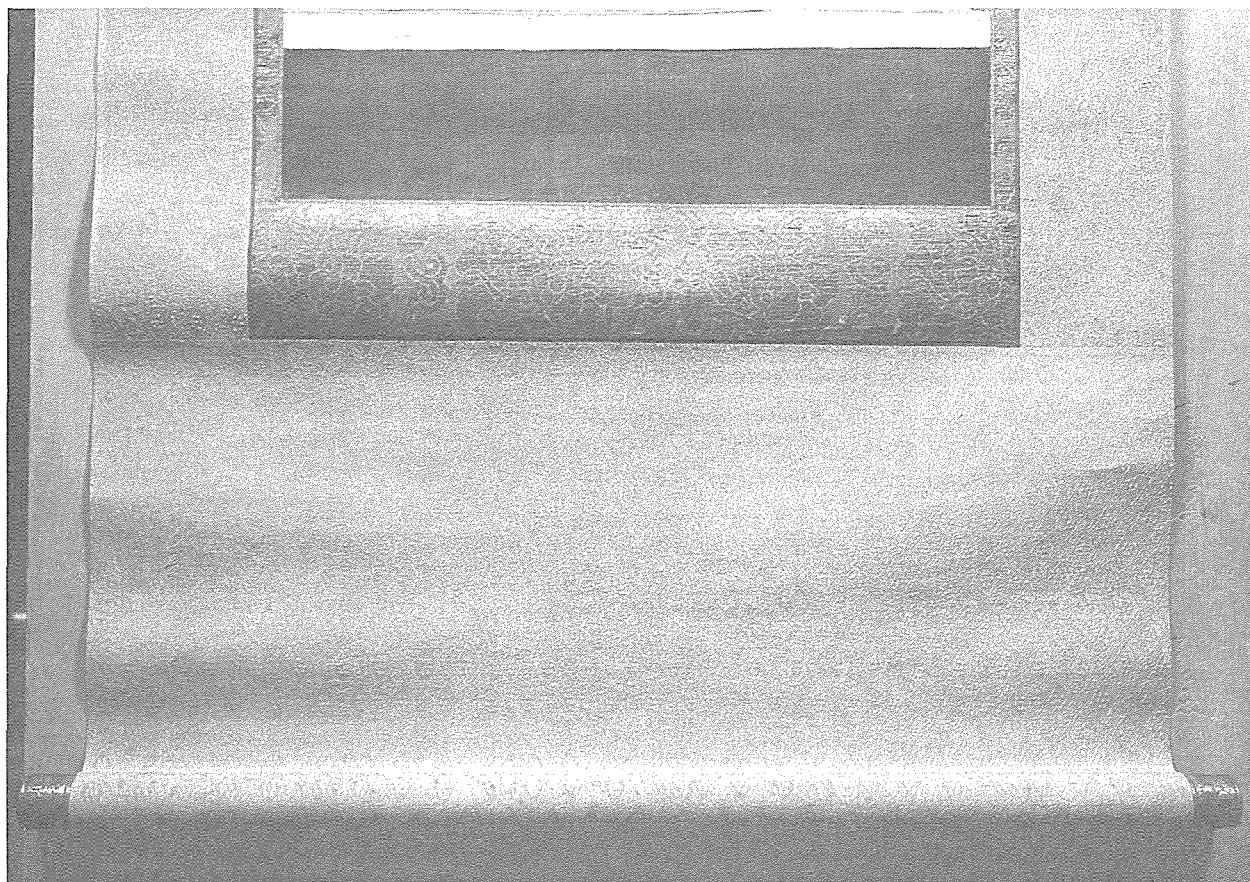


写真 6 修理前 損傷 表装の波打ち

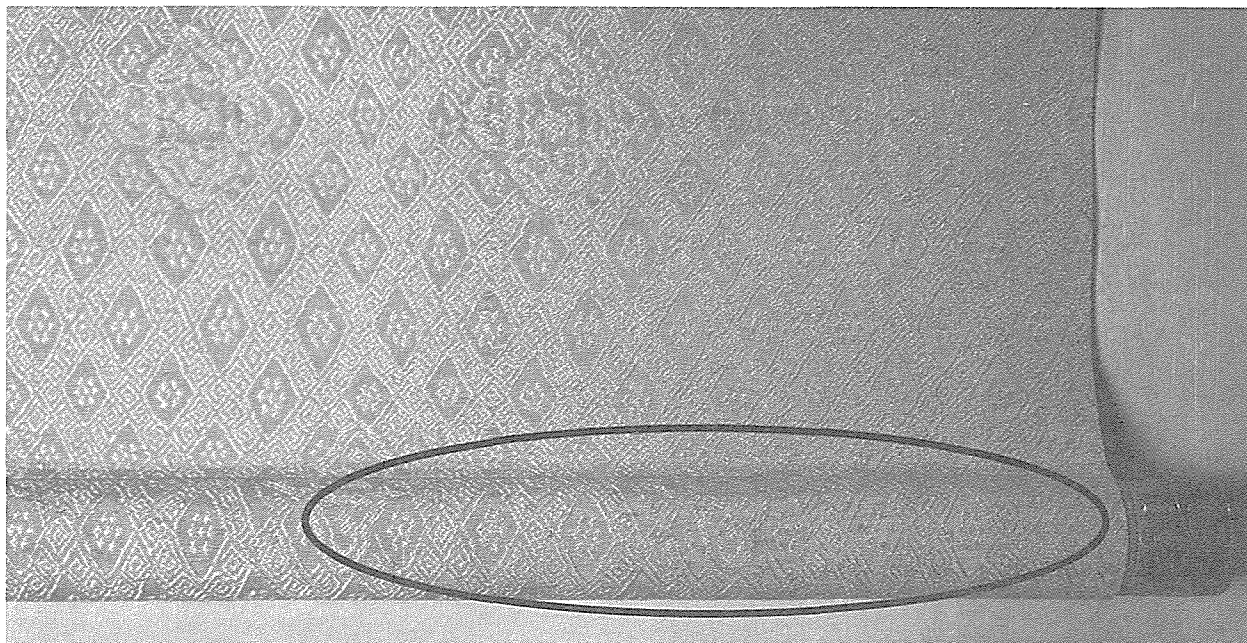


写真7 修理前 損傷 裂地の染み

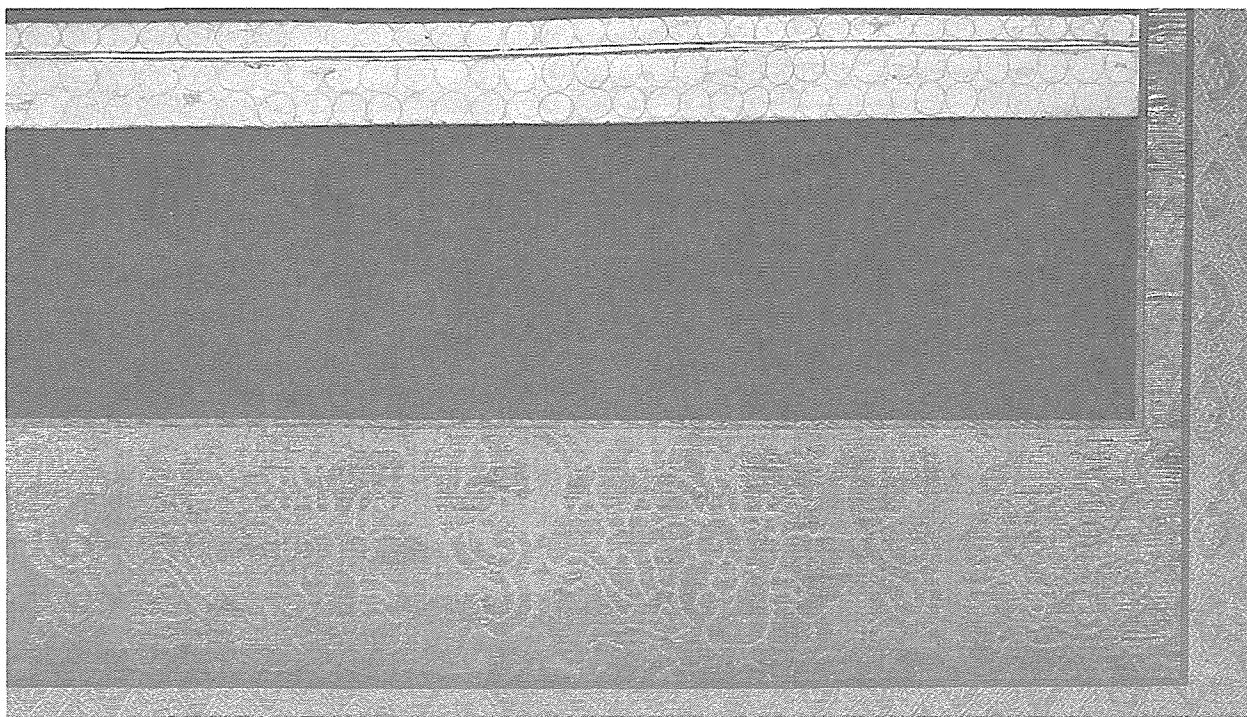


写真8 修理前 損傷 中廻し裂の金糸断裂



写真 8-2 修理後

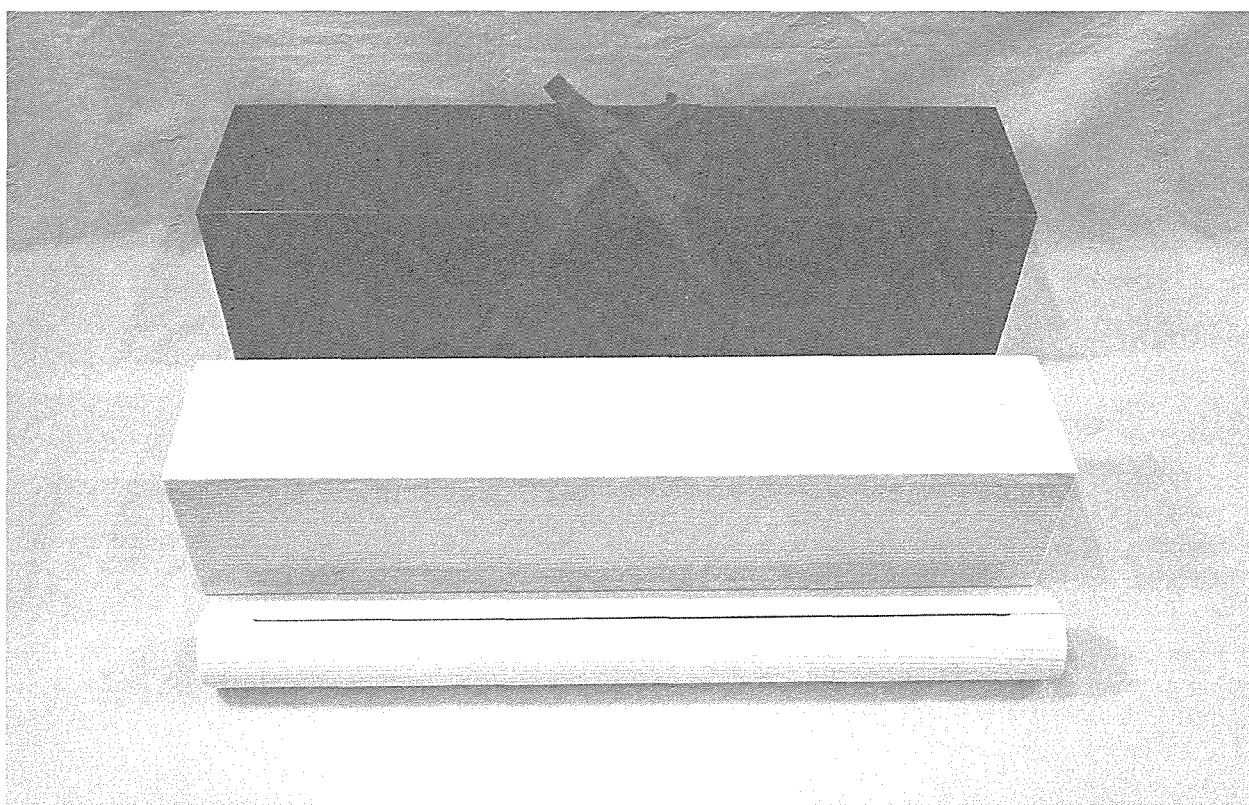


写真 9 新調した保存箱等



写真 10 損傷図面

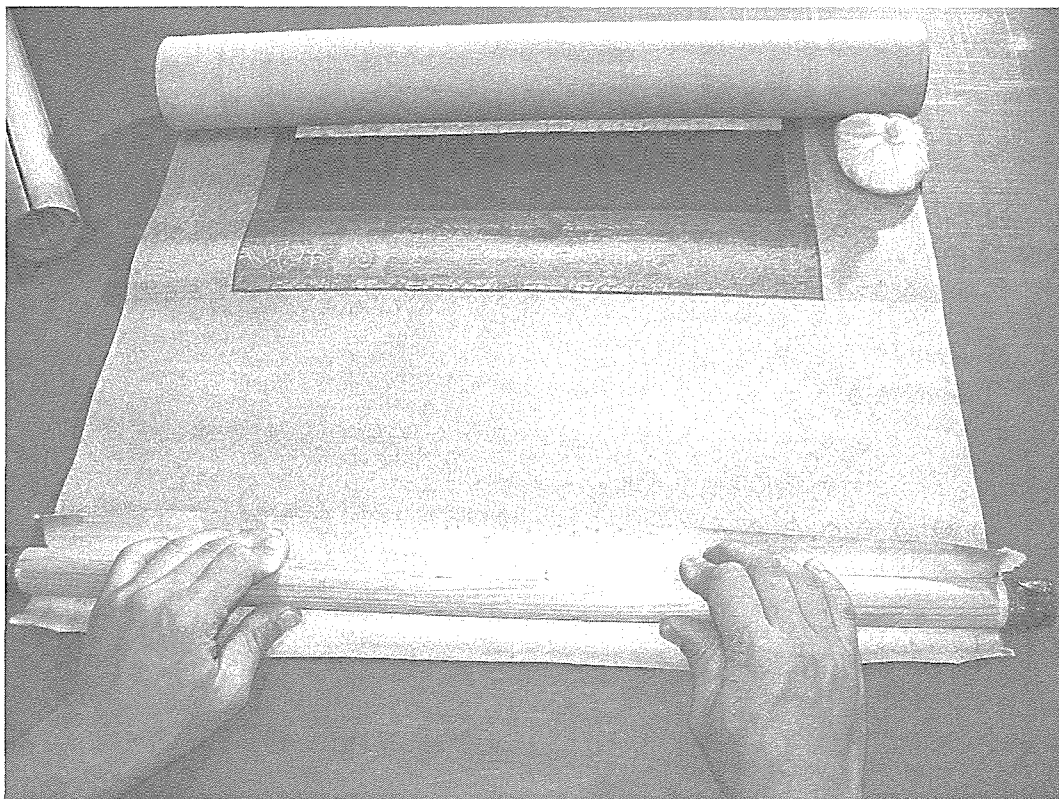


写真 11 解体

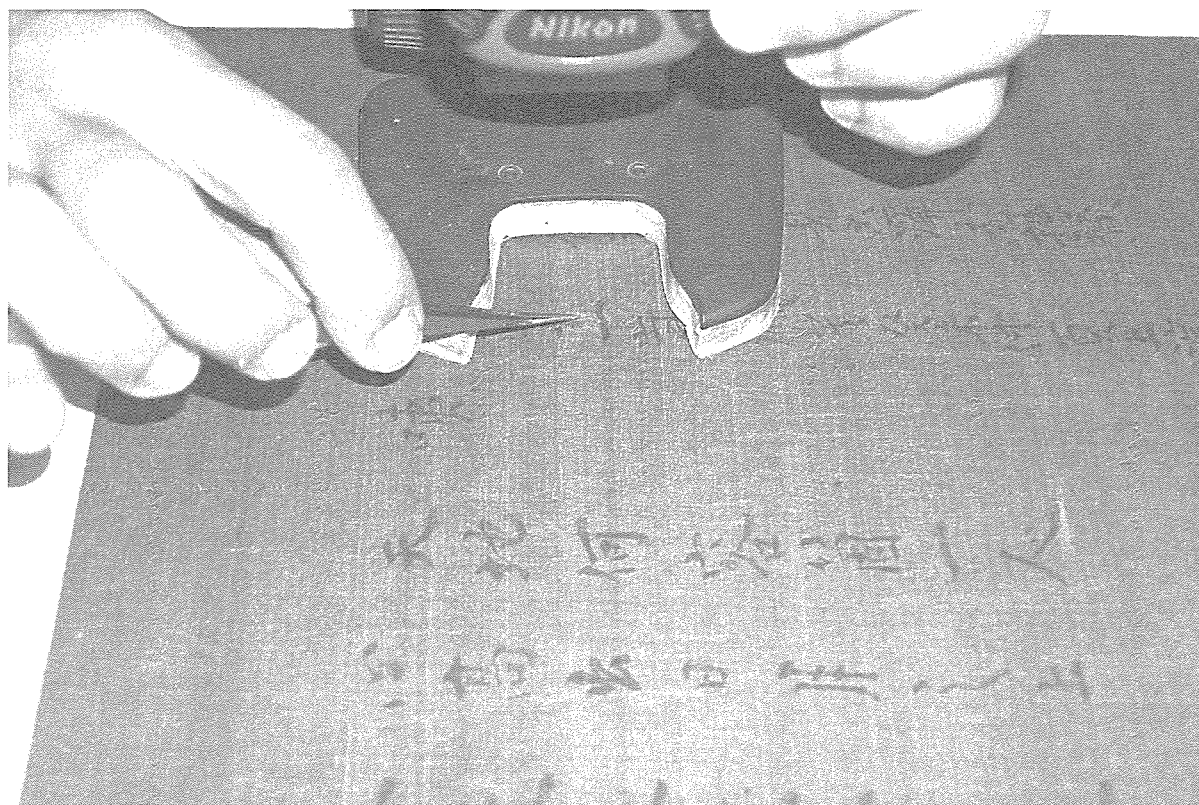


写真 12 本紙表面からの旧補修絹除去



写真 13 旧肌裏紙の除去

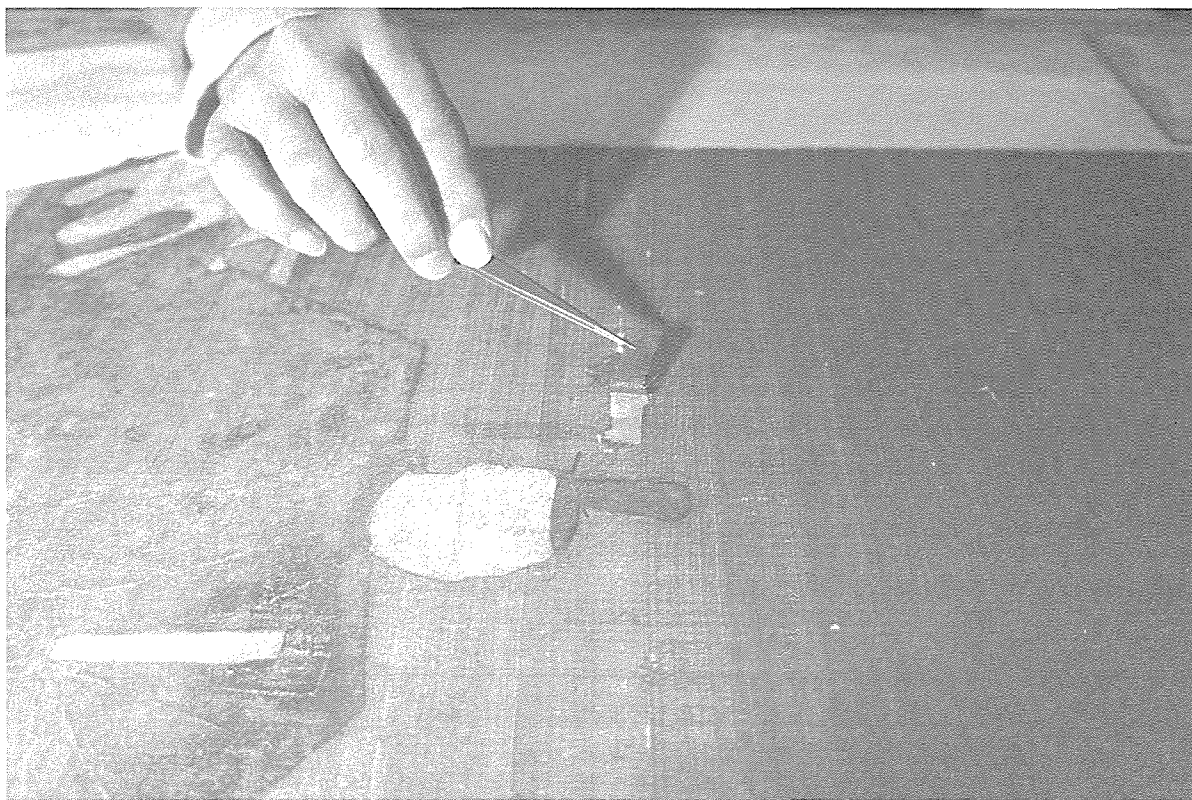


写真 14 本紙裏面からの旧補修絹除去

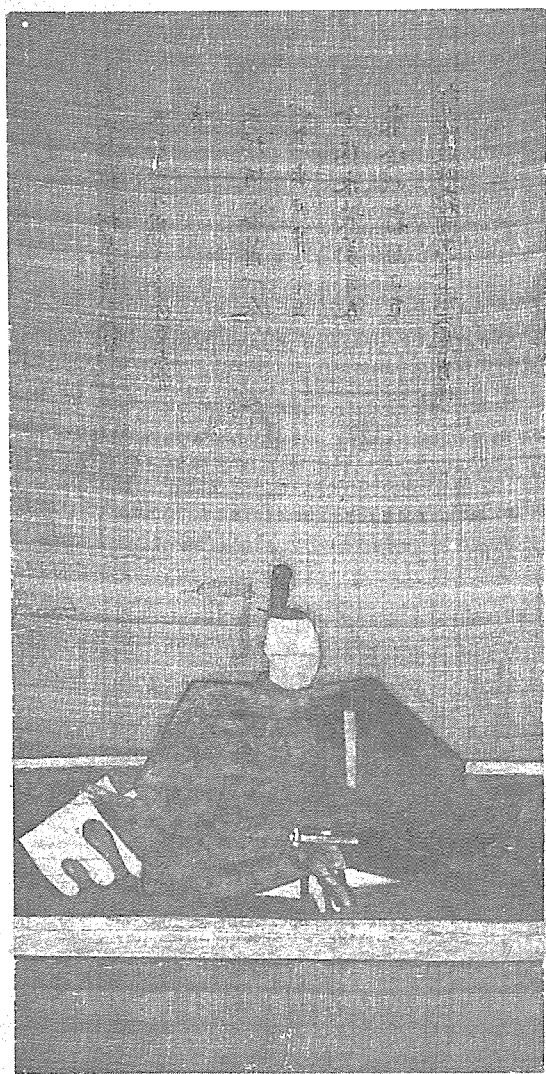


写真 16 旧肌裏紙除去後 裏面

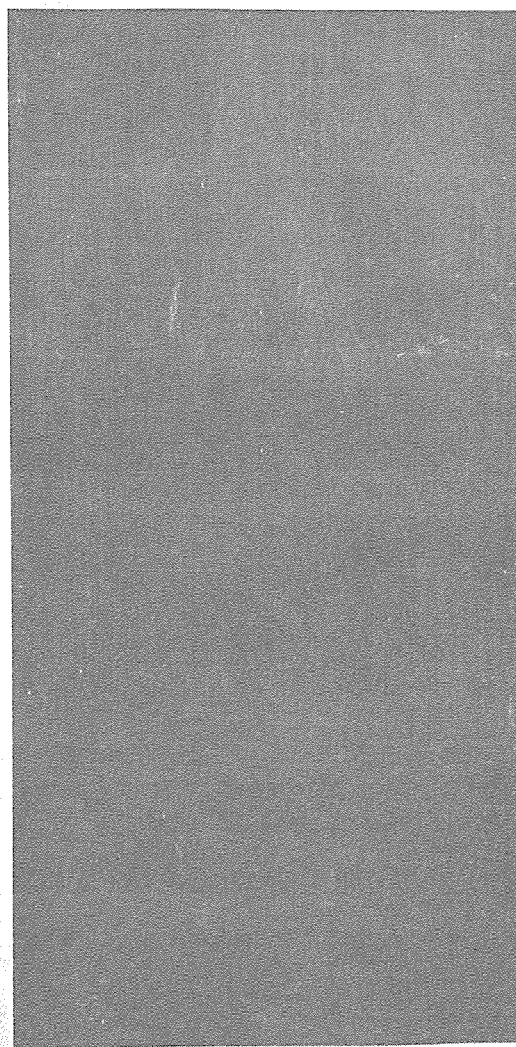


写真 15 旧肌裏紙除去前 裏面

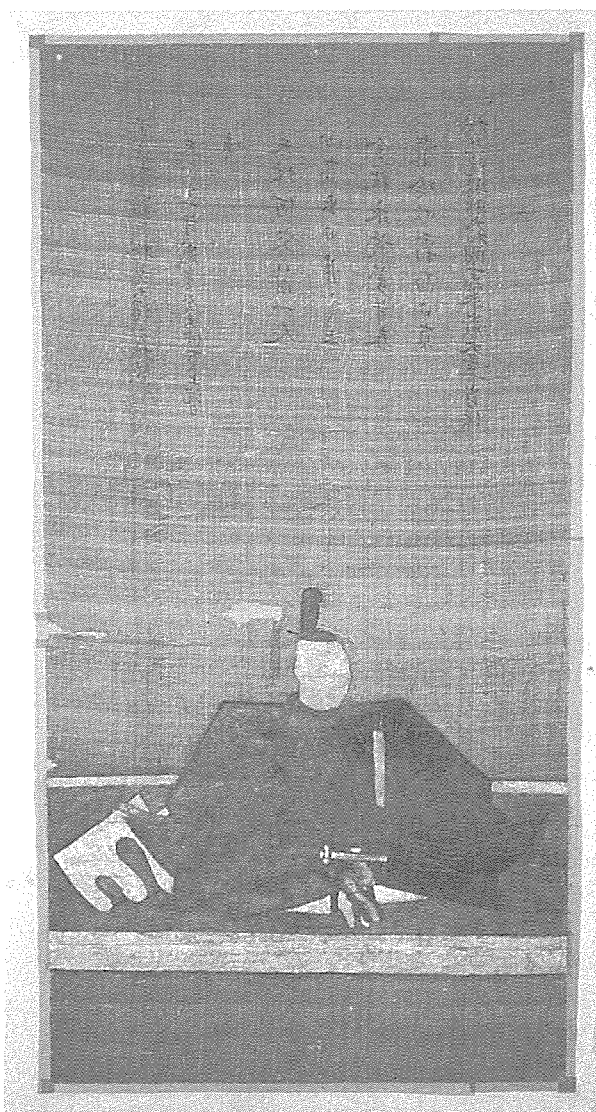


写真 18 補修絹補填後 裏面



写真 17 旧補修絹除去後 裏面



写真 20 補修絹補填後
透過赤外線撮影 裏面

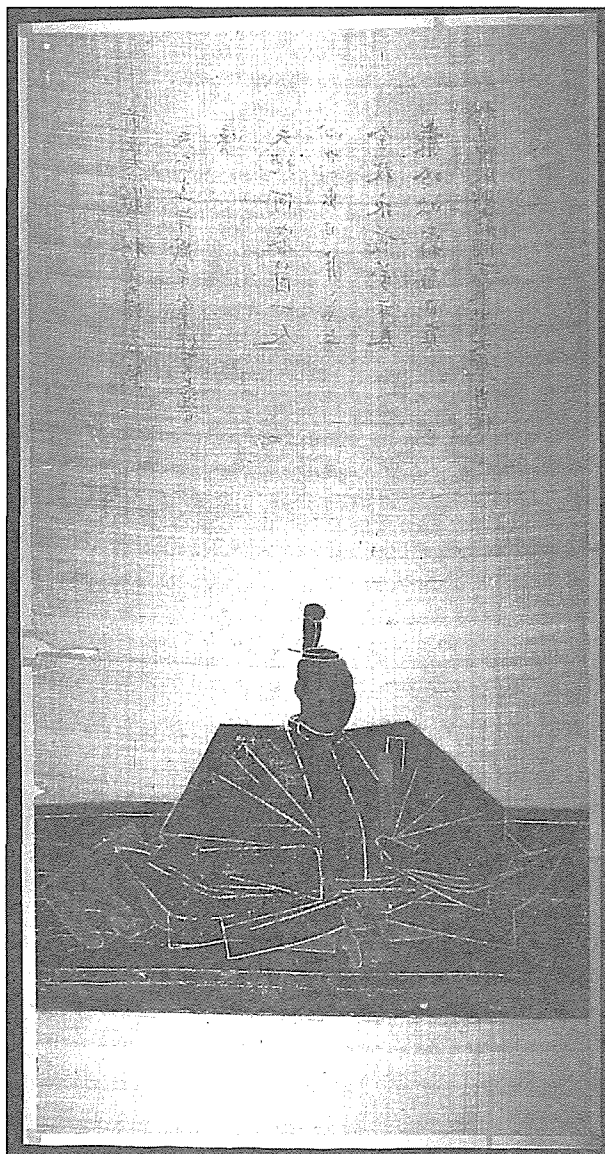


写真 19 補修絹補填後
透過光撮影 裏面

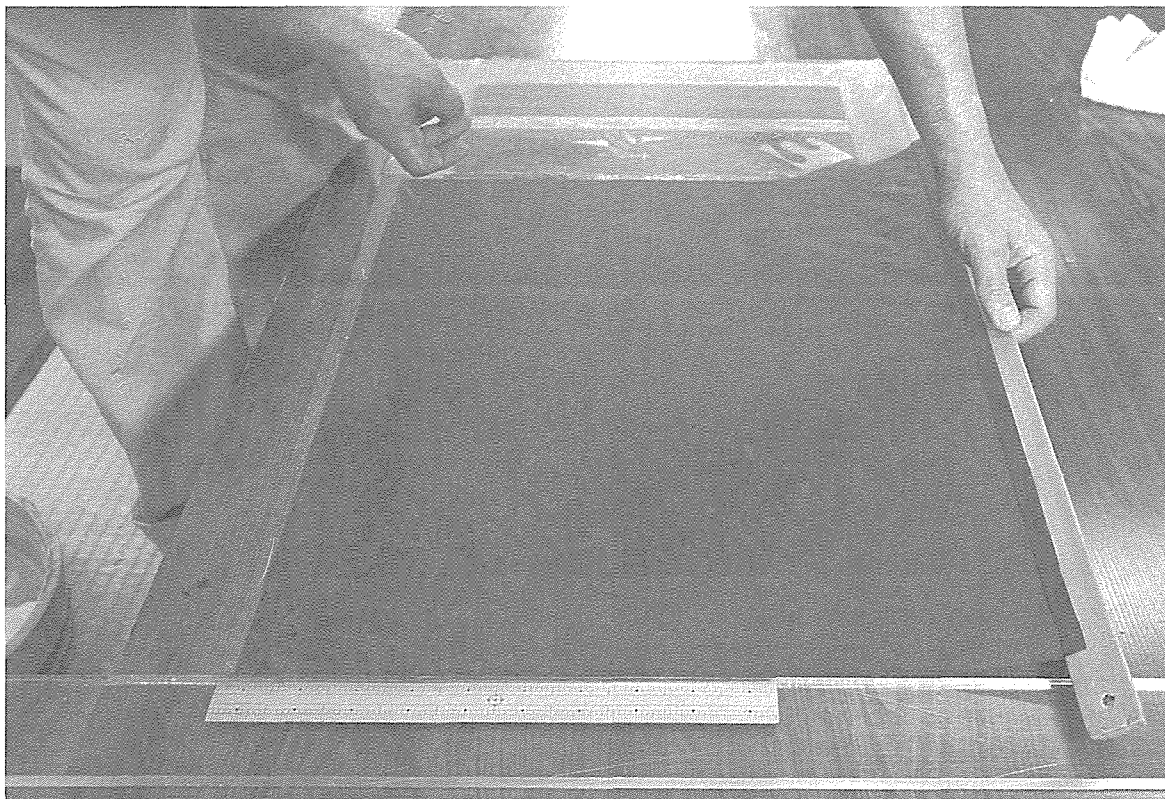


写真 21 肌裏打ち

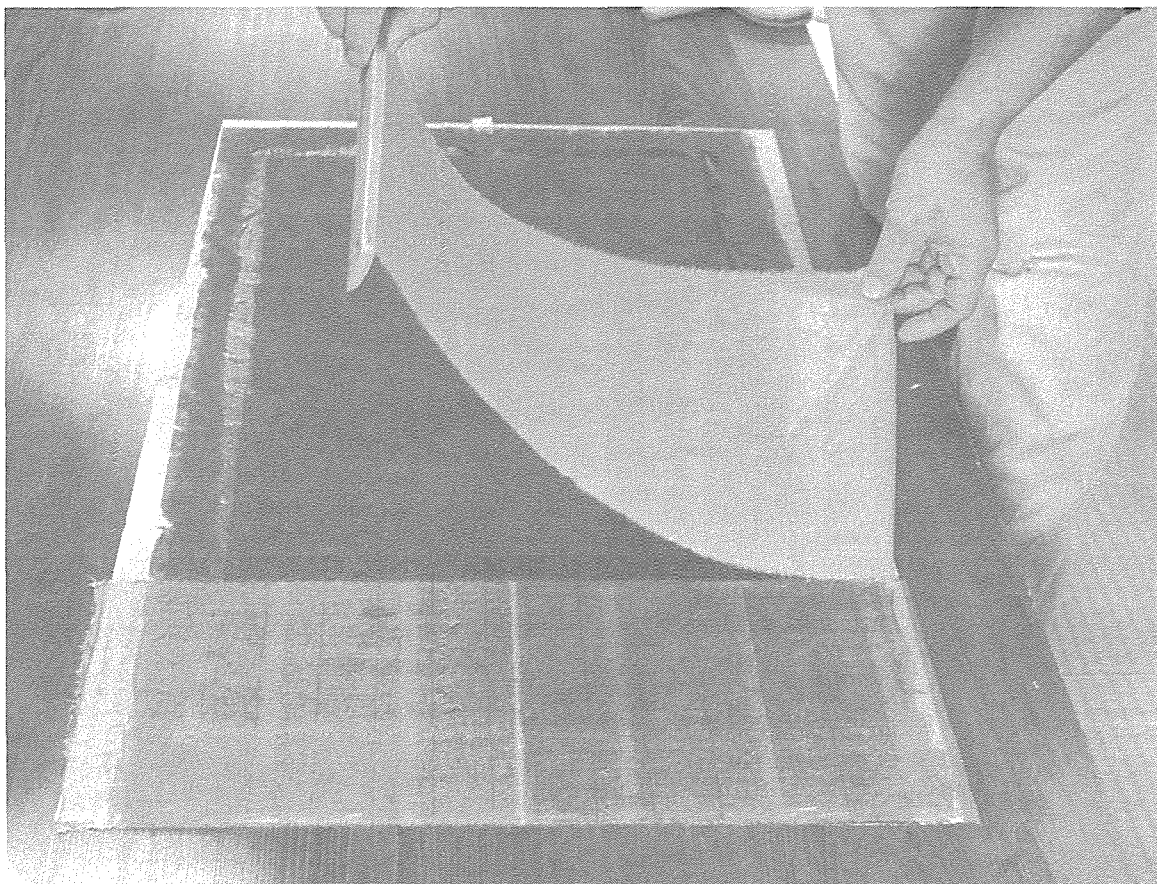


写真 22 増裏打ち

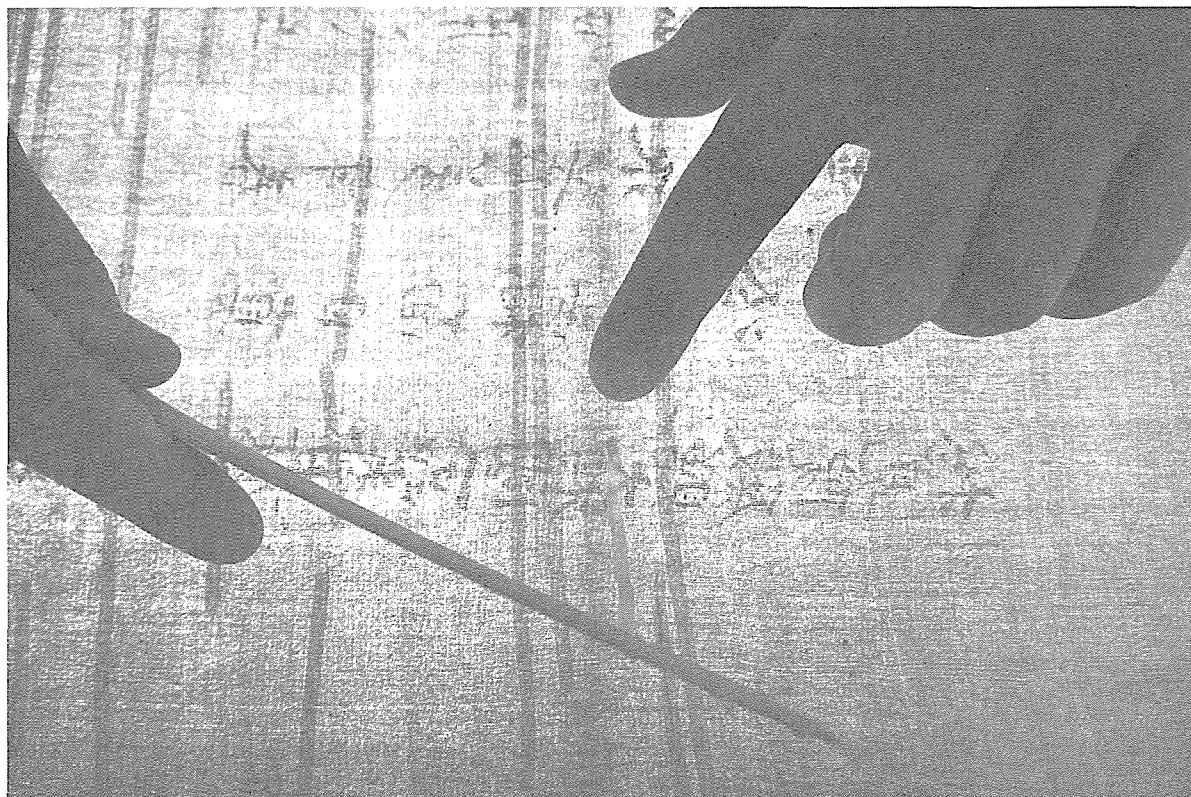


写真 23 折れ伏せ入れ

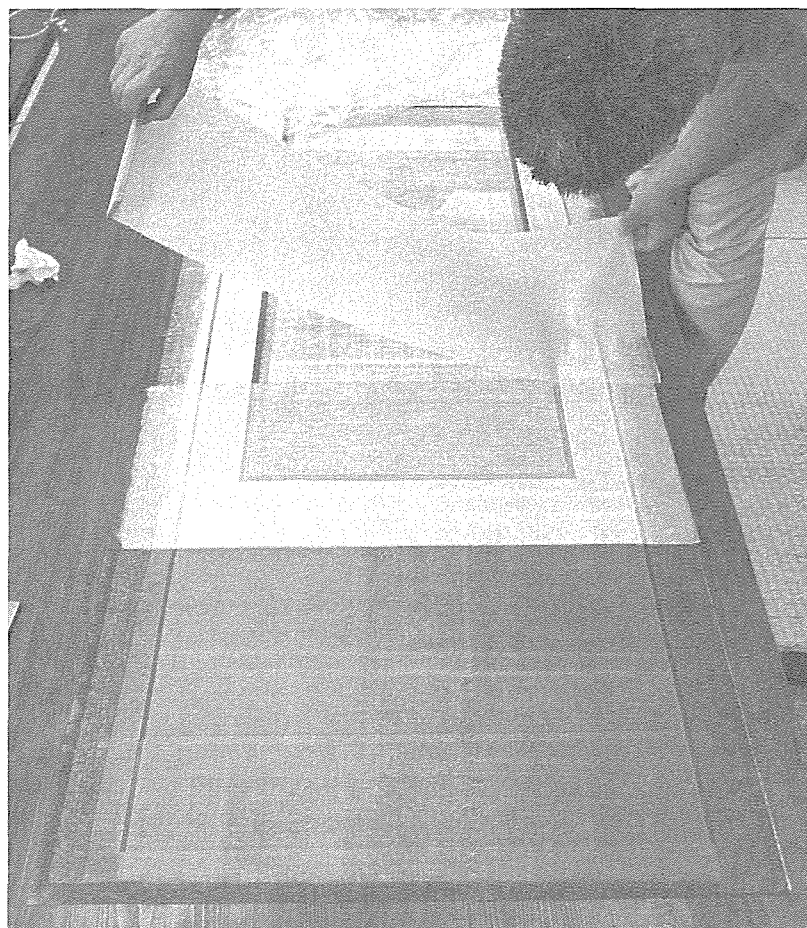


写真 24 総裏打ち



写真 26 甲板 裏面 補強材取付け後



写真 25 甲板 表面 補強材取付け後



写真 27 平緒（表）

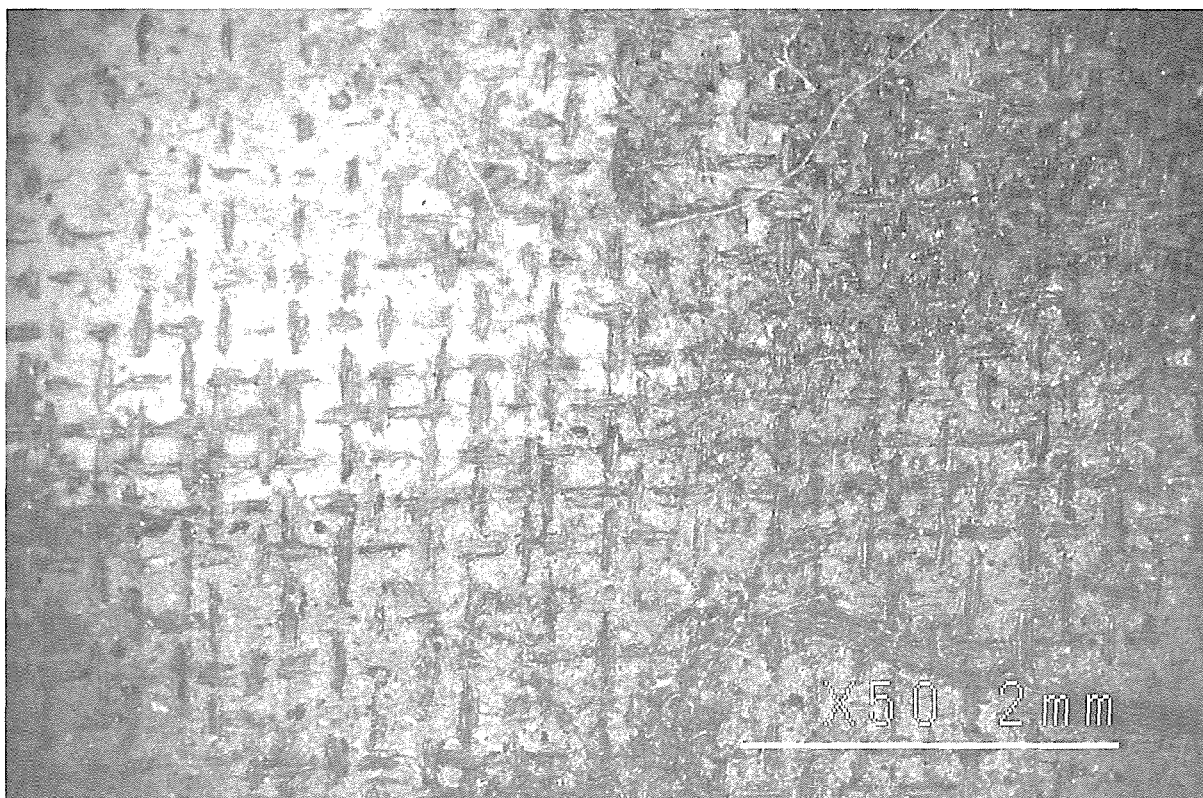


写真 28 平緒（裏）

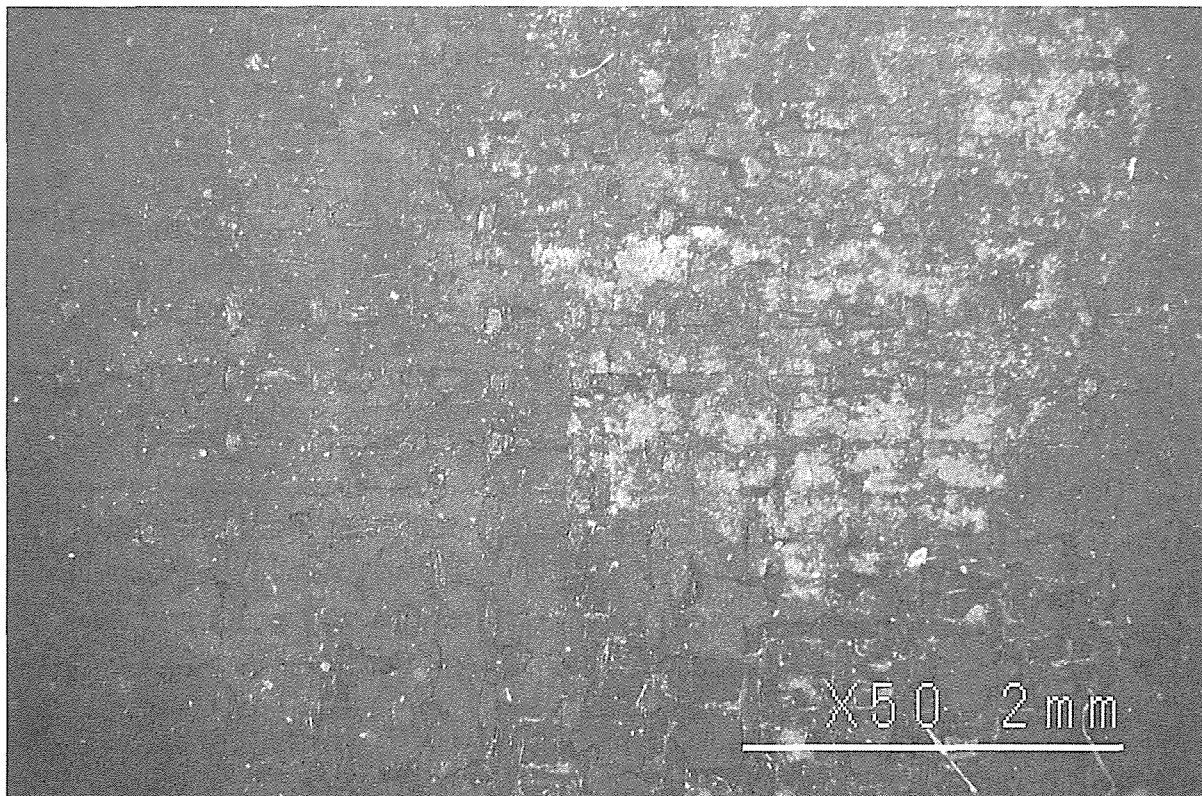


写真 29 束帯（表）

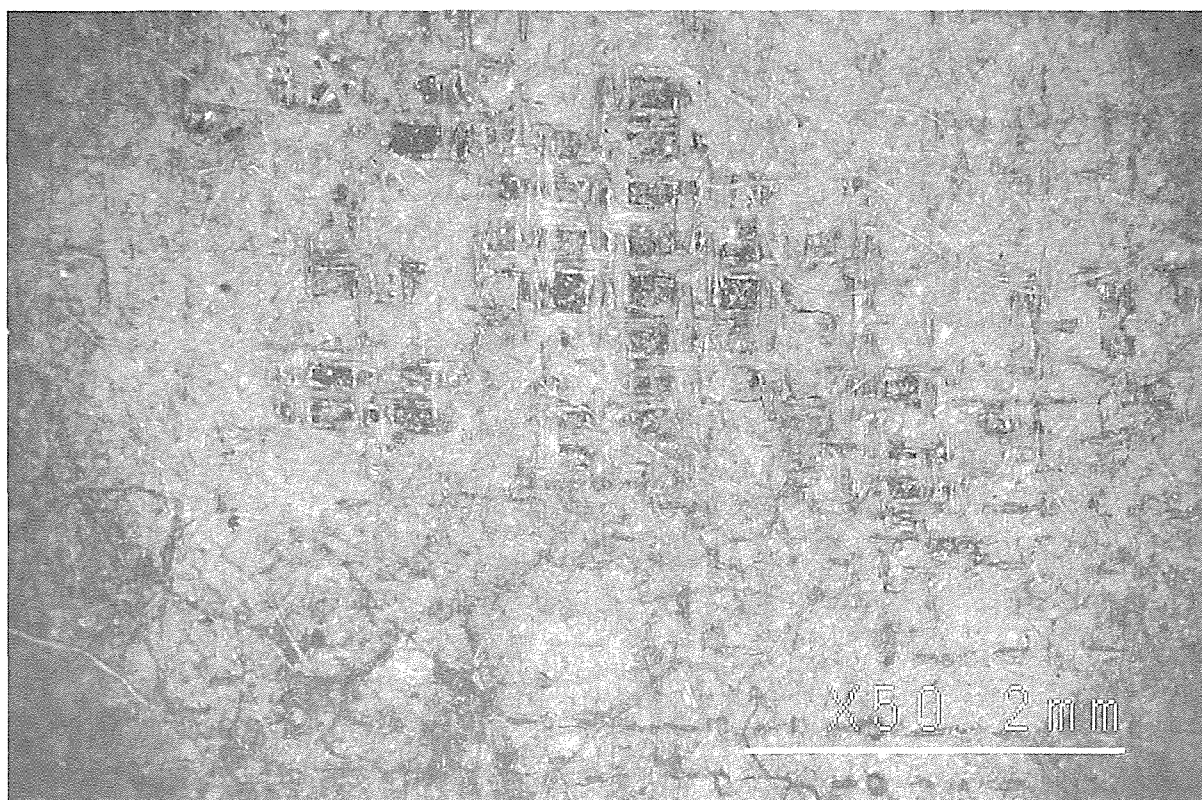


写真 30 束帯（裏）



写真 31 あご (表)

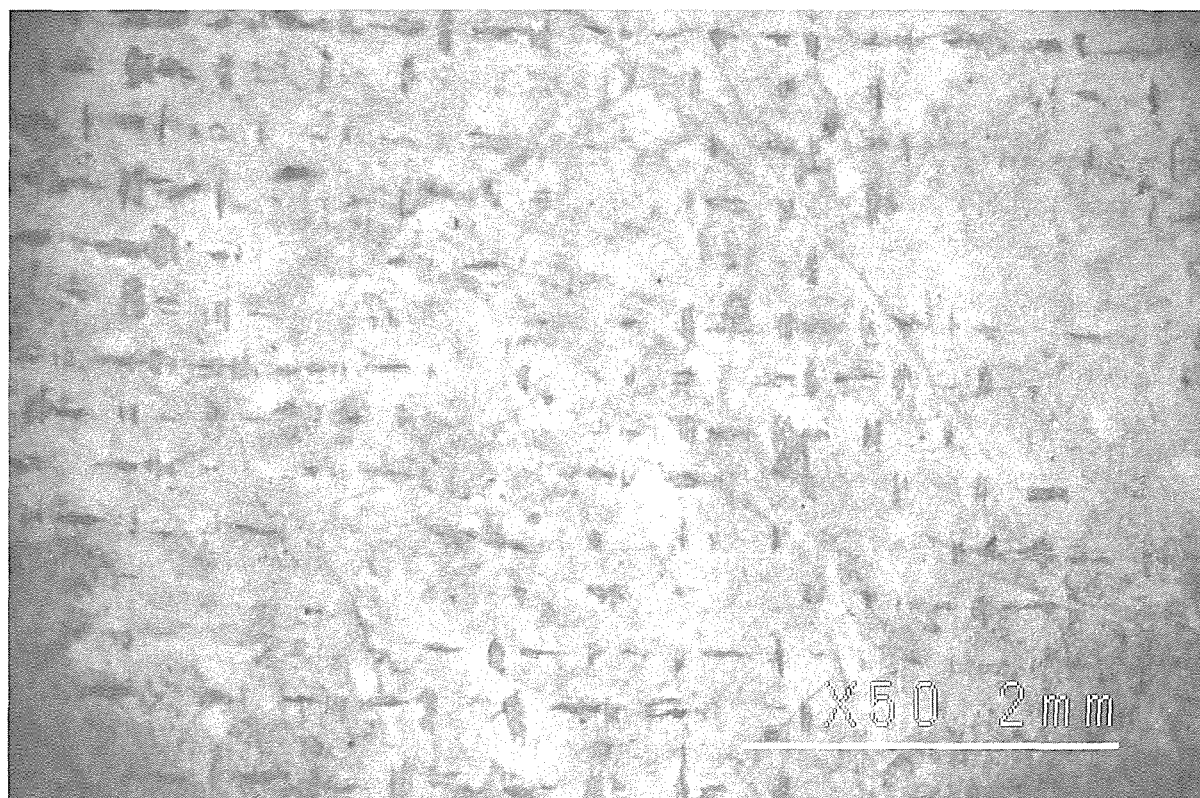


写真 32 あご (裏)

写真 33 束帯胸元の木瓜紋

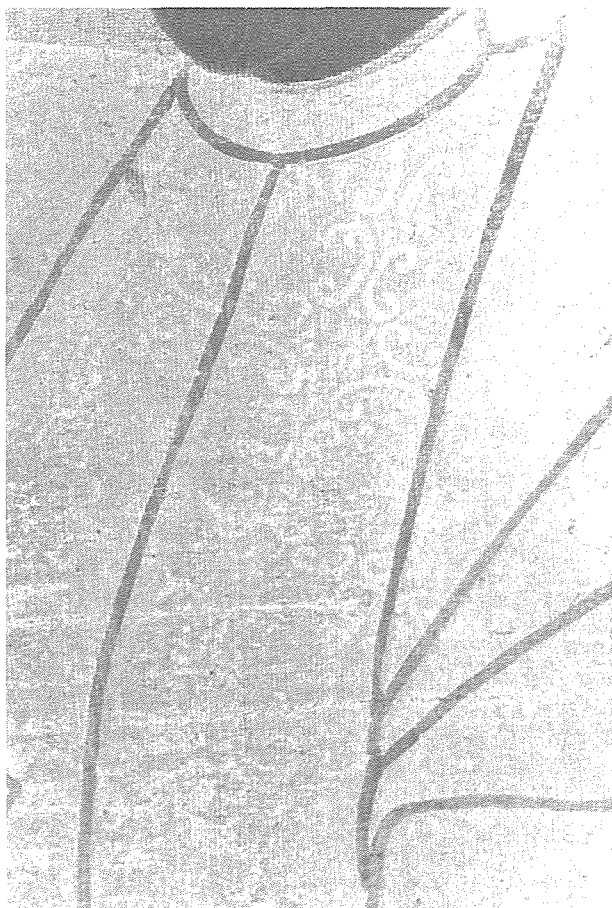
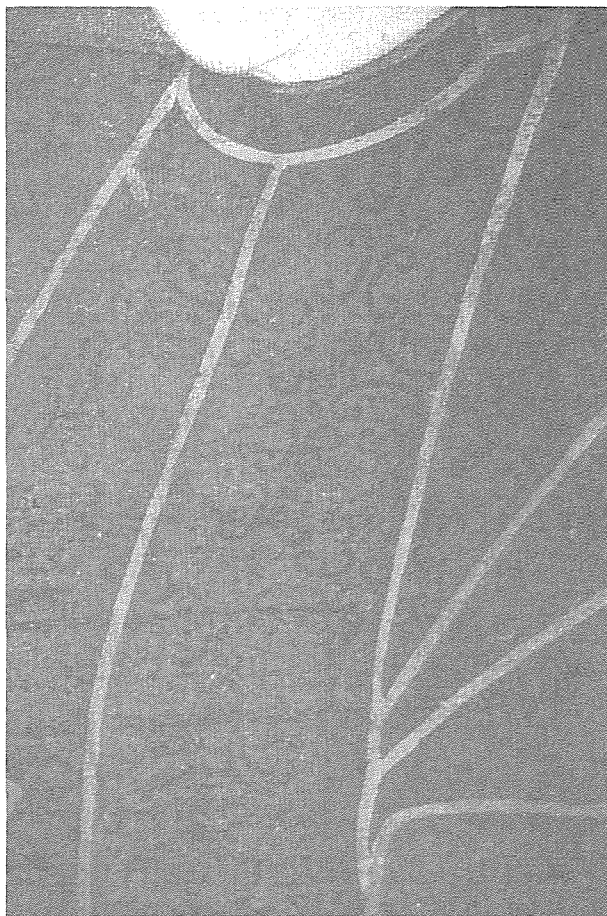


写真 34 束帯胸元の木瓜紋（画像加工）

Arima as the Stage of Medieval Conflict, with a Focus on Ochibayama Castle

Shun Miyoshi

Arima, which is located in Kita Ward of the city of Kobe, is one of Japan's leading hot spring resorts, with a long history. The main phase of its development occurred during the Middle Ages, peaking after it came under the control of Toyotomi Hideyoshi during the second half of the sixteenth century. However, Arima was at the center of disputes during the period of its development as a spa area. One of the scenes of these disputes was Ochibayama Castle, only the ruins of which remain. Historical documents, though limited, also reveal that Ochibayama Castle was the scene of conflict. There is evidence of a battle that occurred in the first half of the sixteenth century when Miyoshi Sosan was the castle's owner. This battle was fought by forces based in Settsu and Harima. After Miyoshi Sosan's departure, Ochibayama Castle came under the control of the Arima family and was no longer an important base. Ochibayama Castle was kept in a state of readiness for the invasion of Oda Nobunaga, but Arima and neighboring areas were decimated and Ochibayama Castle was abandoned. Arima's history can be deciphered by consulting ancient historical documents and records and by examining the geographical features of the Edo period. I believe that a wider range of historical images can be retrieved through an analysis that is not confined to Arima's development as a hot spring resort.

Restoration Report on the Portrait of Oda Nobunaga designated as Important Cultural Property

Shun Ishizawa

The Portrait of Oda Nobunaga (dated to 1583), which is designated as Important Cultural Property, was recently restored by the Kobe City Museum. This report outlines the restoration process and presents observations relating to the preservation of this work. The first observation relates to the use of Ura-zaishiki (reverse coloring) in the painting. The colors that were applied on the reverse side of the silk have been well preserved and have not faded. In addition, the portrait was painted using the same color types on the front and the back. Second, after the painting had been cleaned, the Mokko-mon (the Oda family's crest) on the Sokutai (full traditional ceremonial court dress) was clearly visible. Brushwork was applied to restore damaged parts of the painting. Compared with the other portrait of Nobunaga Taiun-in, Kyoto, owned, the portrait of Nobunaga in Kobe may originally have been more decorative. As suggested in this report, which presents the first findings of ongoing research on the portraits of Nobunaga, it is possible that the memorial portrait in Kobe is part of a canon of portraits of Nobunaga.